幼稚園でしてゐること（三）

――觀察いろ〳〵――

倉橋惣三

「今年の夏は、とんぼをとつて參りますと、いま迄のやうに、たゞ籠の中へ入れて置きますだけでなく、この羽はこうだとか、この足はこうだとか、いろ〳〵くらべては面白がつて居ました」

「比較研究ですか」

「ホ、、、、、そんな大したことではございませんが、時には隨分こまかく注意しまして」

「そうですか。それでは一かどのとんぼ學者におなりでしたね」

「とんぼばかりではございません、海へつれて參りました間なんか、貝殼を拾つて來ては、色だの形だので種類わけをいたしまして」

「貝の名は御承知ですか」

「それがね先生、一々私に聞くのでございますが、お恥しいことに、私も頓と存じませんで」

「澤山ありますからね。それで、どうなさいました」

「太郎も仕方なく、勝手な名をつけてゐました」

「たとへば」

「それがおかしいのでございますよ。紅貝、白貝、まる貝、なが貝、すべ〳〵貝、ぎざ〳〵貝……」

「ハ、、、、、愉快、ゆ貝」

「いやな先生、しやれなんかおつしやつて」

季節の御馳走

榮養研究所　佐々木理喜子

九月の聲を聞いて少し涼しくなりましたが殘暑が未だきびしいので食物の腐敗を注意しませう。又暑さで傷められた胃腸が充分に恢復しませんので、秋口には果物等も色々出盛りますが、梨は消化がよくないので澤山食べない樣にしませう。

❶豚肉の南瓜和へ

材料　豚肉三五瓦　南瓜五〇瓦　莢いんげん　二〇瓦　油二瓦　以上で蛋白質　八・七瓦　溫量一〇五カロリー

作り方　豚肉は薄く切り生姜醬油に三四十分漬けて、フライパンに油を熔して燒き細く纖切りにします。莢いんげんは鹽茹にし斜に程よく刻みます。南瓜は小く切り軟く蒸して摺りつぶし砂糖、鹽で味付けて少々煮詰め豚肉と莢いんげんを入れて和へます。

❷里芋の煮付と佃煮

「太郎は眞面目なんでございます」
「いや、ふざけたんぢやありません。ほんとうに愉快なことなんです。太郎さんは、そういふ方ぢやなかつたんですのにね」
「ほんとに。それで、これはきつと幼稚園で敎へて下さつたことに相違ないと、皆で申して居ります」
「敎へたといふ譯でもありませんがね。それは至極いゝですね」
「一體どういふ風にお導き下さいますのでせう」
「まあ一口にいへば、物に注意させることですね。子どもの興味は元來强いものですが、それを一層綿密に、といふよりも丹念にといひませうか。それで、いろいろこまかい點にも目がつき、自然、比較といつたことも出來て來るのですね」
「とんぼや、貝のお稽古がございますので……」
「そんな時間なんかありませんよ。貝なんか海岸のやうにありはしませんしね。たゞまあ、同じきしやごおはぢきをする時でも、序にそんな指導の機會もありますがね」
「注意の稽古とでも申すのでせうか」
「そんなこともいひませんな。われ〳〵の方では觀察と申してゐるんですが。勿論お子さん達に、そんなことをいひはしませんですよ。さあ觀察始まり〳〵なんてね」
「まさか。ホ、、、、」
「幼稚園といふところは、子どもの年齡から、空想、想像に屬することが多く取扱されるのですが、それに對して、實物を與へるんですね」
「實物と申しまして」
「實際にあるものですね。先づ自然界のいろ〳〵」
「私共學校でお習ひしました博物でございますね」
「違ひますよ。あれは知識ですがね、幼稚園では動植物學の知識なんか敎へはしません。たゞ、草でも木でも、蟲でも鳥でも、ありのまゝに實地觀察をさせるだけなんです」

材料　里芋三〇瓦　油揚一五瓦　人蔘　二〇瓦　はぜ佃煮二〇瓦　以上で蛋白質　八・二瓦　溫量一〇五カロリー

作り方　里芋は程よく切り普通に煮付け、其の煮汁で油揚の纖切りと人蔘の纖切りを一緒に附合せます。煮汁は出ない樣にカラリとさせます。はぜの佃煮を添えます。

❸間食　三色おはぎ

材料　馬鈴薯　百瓦　人蔘十瓦　黃粉八瓦　青海苔　八瓦　砂糖十五瓦　以上で溫量は一五八カロリー

作り方　馬鈴薯を皮のまゝよく洗ひ五分位に輪切りよく蒸し皮をとり擂鉢で押し潰します。此の1/5を餡に取り分けます。少量の砂糖と鹽を加へて馬鈴薯を硬く煉ります、此れを五箇位におはぎの型に作ります。黃粉(少量の砂糖を加へる)と青海苔を夫々まぶします。餡にする馬鈴薯には人參を軟く煮て擂りつぶしたのを混ぜ、砂糖、鹽で味を調へ此れをまぶします。

「喜びませうねえ」

「われ〳〵が特に指導しなくても、子どもにはそういふ興味があるんですがね、中には、そういふ傾向の發達してゐない子どもゝありますから、導いてやる必要がありますね。それに、都會の生活では、そういふ自然物に接する機會も少いですから、幼稚園でその機會を作つて上げるんですね。一度そういふ傾向が引き出されゝば、子どもは喜びますよ」

「そこで、とんぼ研究、貝研究が始まりますんですね」

「研究といふと學問らしいが、子どもとしては、確に研究ですね」

「もの知りになりませうね」

「またそんなことおつしやつてはいけません。もの知りなんかにするのぢやなくて、もの知らうといふこゝろを養ふといふ譯です。理科知識でもなく、そうした心の働き方が主なんですね」

「それで、すべ〳〵貝、ぎざ〳〵貝でもよろしいんですね」

「よろしいといふ譯でもありませんが、貝の名稱だけ覺えても、すべ〳〵、ぎざ〳〵を自分で觸つたことのないのより、よろしいですね」

「觀察と申すのは、自然界ばかりで」

「いゝえ。家の中の道具でも、自働車でも、電車でも、汽車でも」

「いよ〳〵博學」

「またいけません。學じやない。知つてることがえらいのぢやなくて、自分で實物を、よく注意すること、し得ることが望ましいのですよ。つまり、知識そのものを澤山與へられて持つてゐるといふのでなく、自ら實物から知識をつくり出してゆく心の第一の働きを強くするのですよ」

「そこが、幼稚園の有り難いところでございますね」

「有り難いかどうか、そこが幼兒教育の一つの役目ですね」

「私ども、小さい時そういふ教育を受けませんでしたから、知識は教へられて覺えることゝばかり思ひまして」

「教へられたどけのことだから、さつさと忘れて。いやこれは失禮。ハ、、、、」

「ホ、、、、、」

母の書棚

觀察に就てのお話が出た關係から、その參考にする本をと、思ひついた二つ。最も古いのと、最も新らしいのと。

○ファーブル昆蟲記　林　建夫　山田　吉彦譯　岩波文庫　各册金四拾錢

これは、どなたも御承知の有名な古典ですが、その割に讀まれてゐなかつたりします。兎に角、子どもの自然觀察指導には、おとながよく勉强して置く必要のある本です、これをこのまゝ讀ませるのは少し大きい子のことですが、幼兒の母にとつて、先づ第一の指導書です。

○觀察の實際　東京女子高等師範學校附屬幼稚園編　日本幼稚園協會　金一圓

ファーブルと竝べるのは、沙汰の限りでもありますが、幼稚園兒に何をどう觀察させるかの實際的指導書で、幼稚園の先生方に廣く讀まれてゐます。お母さん方も、心ある方はどうぞ。